

タイトル	忘却の点と線 - 上野誠治さんを送る言葉 -
著者	郡司, 淳; GUNSHI, Jun
引用	北海学園大学人文論集(80): 33-40
発行日	2026-03-31

忘却の点と線

— 上野誠治さんを送る言葉 —

郡 司 淳

I

私が2004年4月に北海学園大学人文学部に赴任した頃、英米文化学科に「プリンス」と呼ばれる御仁がいた。ほかならぬ本稿の主人公である上野誠治さんである。

プリンスとは、小学館の『日本国語大辞典』第2版によれば、「(1)皇太子。皇子。王子。親王。また比喩的に用いて、特定の団体の中の、若くて将来を期待される男子」をいう。つまり、上野さんは、英米文化学科さらには人文学部の「若くて将来を期待される男子」であったのである。ちなみに「若くて」の部分は、氏が当時、英米文化学科における最年少の教員であったことから、十分にその要件を満たしていた。

それにしても、ウェールズ公チャールズやプリンス・ヒロの姿をテレビや新聞で拝見していたから、ことさら驚きはしなかったものの、私より2歳年上の上野さんが英米文化学科の最年少とは……。当時の英米文化学科は、学部（1993年）につぐ大学院（2003年修士課程、2005年博士（後期）課程）の設置申請にともない、大御所・大家・長老・重鎮がひしめいていたから、上野さんの苦労も並大抵のものではなかったろう。実際、氏は2001年度から2年間教務委員を務めた後、2003年度にカナダのプリティッシュ・コロンビア大学において在外研修を行い、帰国後の2004年度に再び教務委員になっている。無茶苦茶である。

表1は、そのようなプリンス・ウエノの足跡を委員に限って示したものである。表中、学部長は協議員、自己点検・評価委員、将来構想委員、危

表1 プリンス・ウエノの足跡

年度	委 員
1998	図書館学課程, 研究紀要
1999	教職課程, 研究紀要, 共通教育英語系列 (チーフ)
2000	教職課程, 50周年記念事業検討
2001	教務 (チーフ), 共通教育, 合同編入, 日本語教員養成課程
2002	教務 (チーフ), 共通教育, 合同編入, 日本語教員養成課程
2003	[在外研修]
2004	教務 (サブ), カリキュラム, 合同編入, 日本語教員養成課程, 研究紀要, ホームページ運営
2005	教務 (サブ), カリキュラム, 学生相談, 日本語教員養成課程, 研究紀要, ホームページ運営, 英語教育, 機関長選挙管理 (長), 共通教育英語系列 (サブ)
2006	入試 (総務・判資), 学部内入試制度検討
2007	入試 (次長・総務・マークシート), 学部内入試制度検討, 学部親睦会
2008	入試制度, 教育用視聴覚施設運営, CALL 導入, ブロック, 英語教育, 学部内入試制度検討 (長)
2009	入試制度, 教育用視聴覚施設運営, CALL 導入, ブロック, 英語教育, 学部内入試制度検討 (長), 特別入試, 機関長選挙管理 (長)
2010	協議員, 学科会議担当, カリキュラム, 学生相談, 人文学部予算担当, 英語教育, 入試要覧作成, 学部運営
2011	協議員, 学科会議担当, カリキュラム, 学生相談, 人文学部予算担当, 英語教育, 入試要覧作成, 学部運営
2012	協議員, 学科会議担当, カリキュラム, 学生相談, 人文学部予算担当, 英語教育, 入試要覧作成, 学部運営
2013	教務 (サブ), カリキュラム検討, 学生相談, 英語教育, 日本語教員養成課程
2014	教務 (サブ), カリキュラム, 学生相談, 日本語教員養成課程, 英語教育
2015	学生, セクシュアル・ハラスメント防止対策, 基本権, ブロック・レスブリッジ大学担当, 企画・広報
2016	学部長
2017	学部長, 70年史編纂
2018	学部長, 70年史編纂
2019	キャリア支援, 70年史編纂, 将来構想, 広報, 英語教育
2020	研究科長, 70年史編纂
2021	研究科長
2022	研究科長
2023	在外・国内研修, 特別入試 (チーフ), 人文論集担当, 人文学会, 体育館建設検討
2024	在外・国内研修, 特別入試 (チーフ), 人文論集担当, 体育館建設検討, FD・アセスメント
2025	在外・国内研修, 人文論集担当, 体育館建設検討, FD・アセスメント

機管理委員，地域連携推進機構委員，教職課程再認定検討委員，不正行為防止対策委員および学部内の運営委員とFD委員が，研究科長は，これらの委員（ただし運営委員は研究科内）に加えて大学院委員，教職課程統括委員（2022年度以降）がそれぞれ宛職であるが，紙幅の関係上割愛している。これは，共通教育英語系列委員という現行の共通教育における英語小委員会の前身にあたる委員，2012年度からの大学院の委員も同様である。かてて加えて，上野さんは，委員のほかに2002・2007・2019年度の3回，ブロック大学に学生の引率も行っている。

私は，入試委員（2006・07年度）と協議員（2010～12年度）を上野さんとご一緒している。入試委員では，寺田吉孝先生と共に人文学部の委員が初めて3人体制になったが，上野さんは，1年目に総務と判資を，2年目には次長（総務2年目の宛職）とマークシートを，それぞれ掛け持ちされた。私は，氏が2年目に次長となったお陰で，主たる実働期間である年明けから判資ができなくなったため，年明けからそれまでの出題・校正から判資を担当する羽目に陥った。お互いよく引き受けたものである。

協議員のとくに後半は，学科会議担当委員を兼務しながら，当時学部長であった安酸敏眞先生の理念の下，新たなカリキュラム（2014年度カリキュラム）の策定作業に明け暮れた。言語と文化という人文学部開設以来のカリキュラムを現行の「言語文化」「思想文化」「歴史文化」「環境文化」に改編，さらに教養を重視し，日本文化学科・英米文化学科の双方向的な学びを実現しようとするなど抜本的な改革であったため，苦労も多かったが，大変充実した時を過ごすことができた。

2013年度，私は安酸先生の後を受けて学部長となり，新カリキュラムの施行を任された。そのため，信頼もし，カリキュラムの内容を熟知してもらわれた上野さんに教務委員をお願いした。その代わりというわけでもないが，氏が学部長2年目にあたる2017年度には自ら志願して教務委員になった。当時，文科省から教職課程再課程認定という難題を突きつけられていたこともあり，学部長時代の借りを返したいとの思いが強かったからである。

上野さんが学部長から研究科長の時代にかけて4年の長きにわたって唯一宛職でなく務めた70年史編纂委員については、お詫びの言葉しかない。この委員は、私が学部長時代に当時の学長・木村和範先生から請われて委員長を引き受けたものの、予算があまりに少額でやりたいこともままならなかったため、短気を起こして辞任した結果、氏が後任を引き受けてくれたものであったからである。この場を借り、上野さんと、木村先生に深くお詫び申し上げます。

上野さんは、研究科長2年目にあたる2021年秋、自ら文科省に制度の可否を確認された上で、双方向型リアルタイム遠隔授業を立案し、研究科委員会に提案された。その際、北海道の高校教員に対するリカレント教育の一助ともなればとの希望も述べられた。審議は、当初とくにその実施方法をめぐってさまざまな意見が出されたため、1年半の長きにわたって断続的に続けられたが、最終的には氏の執念が実り、私が研究科長2年目にあたる2024年度から導入されることになった。

私は、おしなべて道徳観に乏しい人間であるが、他人の功を我が物とすることだけは許せない性分であるため、『学報』第139号(2023年9月)の「新研究科長に聞く！」において、次のように発言している。

前研究科長の上野誠治先生が発案され尽力されてきた双方向型リアルタイム遠隔授業を、来年度から修士課程に導入することとなりました。ズームをはじめとするオンライン会議システムを使って、遠方に住んでいる方や働いている方、退職された方、障がい等で通学が叶わない方たちに対して、学びの場を広げようというものです。ぜひ、この制度を利用して本研究科で学んでほしいと思います。

Ⅱ

ところで、表1の基になったのは、原稿の締切が迫るなか、切羽詰まってまずは上野さんのライフヒストリーでもつくろうと思い、昨年12月

23日にお話を伺った際、請うてその後メールで送っていただいた「学内活動（上野）v2」である。

実は、上野さんには、知られざる側面がある。記録を収集・整理・保存し、将来にわたって利用できるように管理するアーキビストとしての資質である。氏は学部・大学における業務はもちろんのこと、ご自分の足跡にかかわる資料の一切を整理・保存されているようで、お願いすれば直ちに必要な資料や情報を提供してくれるのである。「学内活動（上野）v2」はそのほんの一例に過ぎない。果たして、そのようなプリンスの生い立ちとはいかなるものであったのだろうか。

上野さんは、1958年3月10日、石狩郡当別町に生まれた。当時、ご家族は小樽市に住んでいたが、お母様は当別町の実家に戻ってお産をされている。戦後、日本はGHQの指導によって助産婦（産婆）による自宅産から診療所を含めた病院産に移行することになるが、前者が高度経済成長にともなう都市への人口集中によって5割を切るのはようやく1960年のことで、氏の事例は当時ごく一般的なものであった。

小学校・中学校時代は小樽で送ったが、1971年、中学2年生の時に札幌の中学校に転校し、1973年4月に札幌北高に進学。北高では、1年下の学年には須田一弘さんがおり、直接面識はなかったが、上野さんが購入した『文芸ラーメン』という文芸同人誌に短歌や昔話を投稿していた。北高は、1902年に北海道初の女学校として開校された北海道庁立札幌高等女学校を起源とし、1950年に前々年の学制改革によって高等学校に改組された道立札幌女子高等学校を改称し、男女共学とした学校であったため、大人しく真面目な校風であったという。そのような校風に馴染めなかった2・3年上の先輩がこの同人誌を創刊し、同好（同類）の士が集ったとは、須田さんの言。もちろん、上野さんがそのような文学（不良）少年と交わることはなかった。

上野さんがご専門の英語（学）に魅入られたきっかけは、小学校5年生の時に大学生が開いていた寺子屋のような塾に通っていた友人が書いてみせた筆記体であったという（氏曰く「あれが格好よくってだと思っんです

よね、最初は」)。それで英語に興味を持ち、その塾にも通うようになり、さらに札幌オリンピックによる英語ブームによってますますそれが高まることになったらしい。

また当時、年上の従兄弟がタイプライターを持っていたため、それをいじったり、借りて自宅に持ち返ったりしたという。その後、タイプライターは、高校時代に郵便局におけるアルバイトによって貯めたお金でご自身購入されている。

さらには、1972年3月から74年1月にかけてフィリピンの、72年6月から83年2月にかけてアメリカの、それぞれ同年代の女性と文通を行っている。その全期間は、上野さんが中学2年生から修士課程2年生までの時期にあたる。ちなみに、最初の2年間は「掛け持ち（二股?）」となったのは、英語雑誌に掲載されていた住所を頼りに2人に手紙を出したところ、双方から返事が来たことによる。このように文通の期間が確定できたのは、上野さんが「昔の手紙を引っ張り出して確認し」てくれたお陰である(2025年12月25日・26年1月13日付郡司宛上野氏メール)。まさにアーキビストの面目躍如である。

1977年4月、一浪して北海道大学文類に入学。浪人は、須田さんも私もそうであったし、直接確かめたことはないが、おそらく同世代の教員はみんなそうであったろうから、当時は当たり前であった。思えば、若者のモラトリアムを許容できるだけの余力がまだ日本社会にあった時代であった。ちなみに受験生全体に占める浪人生の数は、大学進学率の上昇と相俟って、第2次ベビーブーム世代（1971～74年生まれ）が大学を受験する1990年代前半にピークを迎えるが、18歳人口の減少を背景として、日本経済に「失われた10年」（「20年」とも「30年」ともいわれる）を招来した91年のバブル崩壊と、すでに80年代半ばから始まっていた大学定員の増加を加速させた同年の大学設置基準の大綱化が直接の契機となり、これ以降減少に転じていくこととなる。

文類入学から大学院文学研究科博士課程英米文学専攻入学までの上野青年については、ご自身が「英米文学や英語学との邂逅」と題して『ヒュー

マン』Vol. 20 (2023年2月)にお書きになっているので、ここでは一切割愛する。1987年、博士課程を単位取得・満期退学、指導教官の世話で東日本学園大学に就職したが、大学側の事情で1年後に釧路公立大学に異動し、そこで4年間を過ごした後、大学院の先輩にあたる本城誠二先生に請われて北海学園大学教養部に転任した。人文学部が開設される前年にあたる1992年のことであった。1998年4月、教養部廃止にともない、人文学部に転任し、かくして「プリンス」の誕生とあいなったのである。

Ⅲ

セイジサンハヒトノワルグチライワナイ

忘れもしない、上野さんと同じ教養部出身で入試委員同期の寺田先生の言である。上野さんはことほどさように人に信頼されていた。

今だからこそ告白するが、私は、上野さんが提案された双方向型リアルタイム遠隔授業に対し、その意義は十分認めるものの、当初そこから派生するさまざまな問題に想像をめぐらせ、及び腰であった。しかし、私が最終的に賛成に回ったのは、およそ1年半にわたって粘り強く周囲を説得する氏の姿をみて、「上野さんがそこまでこだわるのなら」と思ったからである。後日、聞いたところによれば、須田さんも同じ気持ちであったという。これも、氏の人望の厚さを物語る逸話である。

上野さんの第一印象は、温厚な紳士という風で、この印象はいまも変わらない。どちらかといえば、苦手なタイプである。というよりも、私は生まれてこの方、不思議とそのような人物と縁がなかった。しかし、氏がその柔和な表情の奥に芯の強さを宿していたことを、のちに私は知ることとなる。

安酸先生から私を経て上野さんが学部長であった時期は、2014年度カリキュラムをめぐって準専任の外国人講師との間にトラブルが絶えなかった。その主たる理由は、このカリキュラムが学部開設以来、各教員の裁量

に任されていた英語教育（EFL教育）を、英語教育委員会（EEC）の設計したカリキュラムにしたがって統一的に運用しようとするものであったことによる。これに加えて、上野さんの学部長2期目（3年目）には外国人講師の処遇改善が当時学長であった安酸先生から提起され、氏は法人と学部の板挟みになると同時に必ずしも一枚岩ではなかった学部の意向を取りまとめねばならない、という苦しい立場に立たされた。

私は学部長時代に寝酒が手放せなくなったが、しかし上野学部長はというと、当然のこととして心労はあったろうが、平静を保ち続けた。いつも穏やかに人に接し、根気強く周囲の意見を聞き、冷静に、しかし人間的に、問題に対処するのが常であった。見事であったと思う。

上野さんは永遠のプリンスである。現在でもなお、英語の筆記体に、タイプライターに、恋い焦がれた少年の初々しさを失っていないのだから。王様と乞食、慢心と卑下の繰り返しのような人生を歩んできた者の、これは、最大限の贅辞のつもりである。

それにしても、上野さんを送る時を迎えようとは、感慨もひとしおである。私は、氏に対し、人文学部の一時代を共に生きたという、同志的な連帯感を持っていた。この思いは、痛みがともなうがゆえに忘却の彼方に押しやっていたことどもを、本稿の執筆のために、上野さんがアーキビスト的資質と抜群の記憶力によって結びつけてくれたお陰で、いっそう深まった。改めて、これまでのご厚情に対し、御礼申し上げます。

上野さん、39年の長きにわたる教員生活、誠にご苦労様でした。